

---

- Death blooms -

カナリイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

- Death blooms -

### 【NZコード】

N4896D

### 【作者名】

カナリイ

### 【あらすじ】

神に愛される事を望み、魂を狩り続ける死神はたった一人の少女と出会い、約束した。少女との約束は死神にとつての禁忌であった。それでも約束を果たし、禁忌を犯してしまった死神を待っていたのは、『消滅』ではなく『始まり』だった。　　これはそんな死神の哀しくも暖かい物語。

「お迎えに上がりました。」

人は死を迎える時、どうして怖いと思うんだろう。

死は本当に微笑むんだ。生きた人に優しく暖かく。

生きなかつた人には、きっと酷く冷たく微笑むんだろうけど。

僕はまた闇を駆けて、羽を広げる。

「お迎えに上がりました。」

死神が羽を広げると、その魂は眠りにつくと誰かが言った。  
そう、私は死神。人の魂を狩る者。

「綺麗な羽ね」

ただ魂を狩りに行って、何事もなく仕事を終わらせるためだけに働く。

それが神への償いだと思っていた。

それが神に許され、愛される事のできる唯一の方法だと本気で思つていた。

そんな私に彼女が言った。

あの言葉から私の世界は変わつていったんだ。

神の愛を求める続ける死神は、いつか気づくんだ。  
神が全ての者を愛している事に。

。

広い廊下、高い天井、大きな講堂。壁には天井まで伸びるゆうに20メートルはあると思われる棚。その棚かたたくさんの資料を運び出す色とりどりの羽を持った、シヤナと呼ばれる妖精が舞っている。

「おい、璃風。」

そんな妖精たちを眺めていると、低い声が私の名前を呼んだ。

「梓衣、何？」  
「千華様がお呼びだ。」

そんな気はしてた、と私がため息をつくと梓衣が軽く笑った。

背の高い梓衣は笑うと、その声と身長と強面の顔から『える怖い』

いう印象を一瞬にして奪ってしまう。

広い講堂には数え切れないほどの妖精が天井付近を飛んでいて、並べられたデスクに座つて仕事をするメイトに資料を配つて忙しく働いている。

その講堂の奥から繋がる道には

梓衣よりもずっと背も高く、体格もいい巨人の血筋にある、レッカと呼ばれる者が護衛をしている。

「えつと…璃風です。」

その扉の中で、2番目に大きい扉の前に立ち名前を言つと、立つていた2人のレッカは顔を見合させて、扉を開いた。

レッカ達には声がないので、目を合わせて会話をするのだという。

開かれたその扉から、また大きな廊下を1人で歩いて1つの部屋に行き当たる。

窓もないため、光は炎のみで何もない。

「コンコン」

「千華様、璃風です。」

近くの炎はバチバチと燃える音を出している。

床には赤く濃い色の絨毯が敷かれている。その廊下の端の絵柄は竜と獅子の戦いが金色の刺繡により描かれている。

「入りなさい。」

その声に廊下の端を見ていた目を、バツと目の前の大きく重たそうな扉に向けた。

その金の取つてを握り、勢いよく引いた。

「失礼します。」

扉を開くとそこにはさつきまでの廊下や扉を思わせることのないほど、光が降り注ぎ天使が舞い降りてきそうな大きな窓がある真っ白で広い部屋が広がっていた。

「そなたが、璃風。」

「はい。」

綺麗な声をまとつて現れたのは、白に近い金の長い長い髪を床に垂らして立つ女性だった。

その女性は田から鼻にかけて純白の包帯のよつたシルクの細い布を巻いていた。

その方の着ている服は真っ白のローブに金の刺繡がされた羽織もの。

「そなたはどんな廊下を歩いて、どんな扉をくぐって来たのです？」

その女性は口元を少し緩ませると、優しい物言いでやつた。  
その質問を理解するのに少し時間がかかり、ようやく今まで通つてきたこの廊下と扉の事だと思い説明した。

「暗くて赤い絨毯が敷かれていて、炎だけがその深くて広い廊下照らしていて、

扉の取っ手は金色をしていて、とても重く厚みが・・ありました。」

そう説明すると千華様は、優しく笑つてその美しい声を出した。

「ふふ。そんなに私が怖かったかしら。まるでその先の部屋にいる

私は、そなたを取つて食べそうね。」

「いえっ、そんな・・！」

目が隠されているものの、その口元からとても美しい方だと思えてならなかつた。

まさにこの光溢れる場所に生まれたお方だと思わせられる。

「この廊下と扉には幻の術がかけられているのですよ。

ここを訪れるものが、もし受け入れられし者でなければ永久に迷うのです。

そして受け入れられし者の想像している廊下と扉が見えるのですよ。

「

あの廊下も扉も私が想像したもので、だからこの部屋には全くそぐわないものだつた。

もし今廊下に出たら、床は白く、床以外の壁は全面が窓で、天井はドーム型の窓になつていてそこから光がさんさんと降り注いでいるかもしね。

「それで、璃風。」

千華様は、そんな事を想像している私の名前を呼んだ。

「はいっ。」

「そなたの仕事ぶりを聞きました。」

「・・・はい。」

こうなる事は分かつていて。

「この間の件で、蘭<sup>ラン</sup>も大変悲しんでいたわ。」

「すいませんでした。」

「謝るだけで済まされる問題じゃないのは、そなたも分かつてている  
でしょう。」

「はい・・・。」

それでもあの日あの時、私がしたこと後悔はしない。

「そなたはそれが禁忌である事は分かつていてるでしょ。」

「はい。」

「それなのに何故。」

「・・・・・私はそれでも・・・・」

見えない目が私を見つめているような気がした。

シンと静まる部屋中に、鳥の鳴き声が響いた。

その鳴き声をあげた黄色の小鳥が部屋を回りながら千華様の細く白い指にとまつた。

その小鳥が何度も声を上げると、千華様はその小鳥に呴いた。

「ええ、そうね。分かったわ。ええ、そりゃえて。明日には、ええ。

「

チチチと小鳥が鳴くと、千華様の指から舞い上がり、開け放たれた大窓から風とともに飛んでいった。

それから千華様は私の方を向いて微笑んだ。

「処分を言い渡します。」

それがどんな処分であろうと、あの約束を破る事はできなかつた。

「はい。」

消滅の門さえ怖くなかった。

それだけ覚悟して術を解いた事を、後悔なんてしていない。

「そなたは今日を持つて」

明るくこんなに静かな部屋で、処分を告げられる事までは思い描かなかつた。

もつと暗く重いような部屋で、終わりを告げられるのだと思つていた。

「ハーレスへの昇格を言い渡します。」

「・・・・え？」

ハーレス、そう言われる者は死神の中でも特殊な者達。

「その顔は『消滅の門』でも思い浮かべていたのね。」

「はい・・えつ！？・・私、昇格！？どうしてですか！？」

その処分に頭がついていかず、少し大きな声を上げると千華様はよ  
り一層笑顔を見せて言った。

「その理由はおのずと見えてくるでしょう。まあ、お行きなさい。  
・・え？はい。・・失礼しました。」

ペコリと頭を下げて顔を上げる。

「あのつ、ありがとひざいました！！」

そう声を上げて、急いで軽いガラスの扉を開いて明るい廊下へくぐ  
つた。

「ふふつ、おかしな子。」

千華は1人になつたその白い部屋で、出て行つた璃風の言葉を思  
出して笑つた。

大きな窓からは光とともに、青い小鳥が2羽舞い降りて姿を少女に  
変えた。

「千華様」「千華様」

「あら、2人とも。彼は今出て行つたわ。」

「本当にハーンスへ？」「あそこは問題児を集めたがる。」

「そうね。」

「それを知りながら」「彼をそこへ行かせたのですか。」

「ええ。」

青いワンピースを着た、同じ顔をしている少女の言葉に  
千華は笑つてそう言つと静かにその空氣に溶けるように姿を消した。

ハーレス・・・そう呼ばれる死神は、普通のライザと呼ばれる死神とは少し違う仕事を任せている。

そして私は今日、そのハーレスに配属された。

「入るなら、早く入れ。」

それはドアの前に立つ私に眩かれた言葉なのだろうか。  
そんな風に思つて振り返ると、そこに立つていたのは切れ長の黒の  
眼に、真つ直ぐに短く降りた黒髪の男が立つていた。

「誰だ」

その人は梓衣と同じくらい高く、眼の高さは私と20センチ近く差  
があつた。

その声はまるで黒一色で、梓衣以上に怖いという印象を『えてくる。

「えと・・・璃風つて言つますー今日からこの配属になつたライ・  
ハーレスです。」

「ああ。元ライザの。」

「はい。・・・えつと・・貴方は?」

「俺は漆黒シックだ。」

「（うわつ。そのまんまーー）」

「何だ」

「いえつ。すゞペッタリなお名前だと思つて。」「  
よく言われる。で、入るなら入れ。」

キイと古びた扉が開く音がして、漆黒さんが扉を開いて招き入れる

ようになんか小さなスペースを作ってくれる。  
その腕の合間から見える世界はまるで、今までに想像もつかないよう  
うな世界が広がっている気がした。

「はいっー。」

勢いよく入ると、漆黒さんの黒いローブが揺れて顔にかかる。

「わっふ」

前が見えないで真っ暗な世界になり、足を止めると何か温かなものが頬に触れた。

その瞬間、黒のローブから開放され、また世界は明るく映し出される。

「おい、平氣か。」

その温かな手と、同じ田線まで降りてきた黒い目が優しい事に私は気づいた。

心配そうな顔をして、私がにっこりと微笑むと安心した顔を見せて。この人はとても温かな人に違いないんだと思った。

「はいっ。」

「そうか。」

それからゆっくつと大きな手に握られて部屋に引っ張られる。

真っ黒に染まつた彼はその部屋の中央まで歩くとパッと手を放して大窓を見た。

大窓からの光が眩しいほど輝いて、広い広い部屋に白のタイルが広がっている椅子がいくつかと小さなテーブルが4つくらいあるだけ

だつた。

他に目だつて存在している物はなく、ただ天井も高く、広々としてるという印象が強い。

「二二」は変わつてゐる。」

漆黒さんが口を開いて、そんな事を言つた。

この部屋に入つたときから、薄々は気づいていた事だつたが、二二の人達でさえそう思うのだからそうなのだろう。

「そうかもしれませんねつ。」

「ハーレスがどんな集まりか知つてゐるか。」

「え？」

「ハーレスが何と呼ばれているのか知つてゐるか。」

漆黒さんはそういつと、窓から田を背け私を見た。

「『問題児』ですよね？」

ライザの中でも有名だつた。

ライザから昇格とされているハーレスに行きたがる者は誰もいない。

ハーレスに回る仕事は、変わつてゐると聞いた。

だから、昇格を決める人は『問題児』を集めたがつてゐるとか。

「知らないわけないか。」

「はい。有名ですしお。」

「・・・それなら何故、そんなに平然と俺といられる。」

さつきから、わけの分からぬような質問ばかりをしてくる漆黒さんには、私は少しおかしくなつて笑つた。

その笑い声に漆黒さんはもつとワケがわからないと呟つぶつ、「、眉間にシワを寄せている。

「あははー！漆黒さんが『問題児』だとは思いませんよー！どちらかというと『変わり者』の方が近いです。」

響くように部屋を渡っていく自分の声が、妙に恥ずかしくなつて顔が熱くなる。

その顔を終始かゆいに終たし、縫黒ちゃんの顔が耳に響いた。

「はい？」  
「そうか。とにかく、リブ。

「コラ」とぱんくんな字を書くんだ。もしかして・・・

これまた妙な質問に、どんな説明が一番しつくり来るかと考えるまもなく言葉がスルスルと出てきた。

「瑠璃色の風か。」

ああ、誰かに似ている。

私の大事な誰かに、とても似ている。

「どうぞお入りなさい？」

勘

初めて私を璃風と呼んだ、あの人に。

バンッと強く扉が開かれる音がして、私は急いで振り返った。

その先には死神には珍しい銀の髪をした、これまた長身の男の人が立っていた。

「おはよー、漆黒ーー珍しいな、こんな朝早く」「……」

「（何だらう、このハイテンションな生き物は。）」

「朝っぱらから五円蠅い。」

「わあん、酷いつ……で、こちらのお嬢様は？」

「あ、わ、私、今日からここで働く璃風ですーよろしくお願ひしますー！」

「璃風ーー可愛いく前だねえー。」

「ありがとうございます。」

漆黒さんは全く違った感じの彼は綺麗な銀の長髪で、思わず見惚れてしまった。

そんな私に彼はぱべーっと一礼すると、ヒツヒツと微笑んで名を召乗つた。

「僕は光紗ヒカルとこつのだーよろしくね、璃風。」

「はいっ。」

その名前はあるで、光を放つ銀の髪にピッタリだと思つた。彼が私と漆黒さんの周りを回つてると、扉からまた音がした。

「お密様でありますか。」

そこに立つてるのは、茶色の巻き髪で可愛らしく笑つている私と同じくらいの髪の少女。

その少女は上品に扉を閉めると、いつかに一歩ずつ歩いてきて走り回る光紗さんを右手でパシッと止めた。

「暴れるな」廊下でして下わこあります。」「はあい、・・・。」

彼女の言葉一つで、おとなしくなつた光紗さんを見てクスリと笑つてしまつた私を、彼女の眼が射るよつに見た。

「どなたでありますか。」

「今日からここで働くライザから昇格してきた、璃風だ。」

「ヨロシクお願ひしますつ！」

「じぢうじぢうじであります。」

軽く頭を下げる私に、彼女は深々と頭を下げる。その礼に、私はもう一度深々と頭を下げた。

「貴女のお名前は？」

「私は『紫陽花の君』『223Y』と呼ばれてゐるであります。」

『紫陽花の君』と呼ばれる、そつ名乗つた彼女は優しく微笑んだかのように見えた。

ライザやハーレスの中には、未だ名を持たない死神がいる。その死神はある一定の力をつけると、名前を付ける事を許される。それまでは、あだ名、番号で呼ばれたりする。

私も璃風の前までは、『離菊の君』とか『154K』と呼ばれていた。

「『紫陽花の君』とても綺麗ですつ。」

「ありがとうございます。」

「女子がいると華やぐねえ。」

「223Yに失礼だろ。」

「そうだね。すまない、紫陽花の君。」

「別に気にしないのであります。」

3人の声が広い部屋を少しだけ賑やかにした。そのタイルの上を歩く靴の音がたくさんする。ソレが少しだけ安らぎを感じた。

「もうそろそろ時間だ。」

「これで全員そろつたねえ。」

「4人ですか！？」

「そうであります。」

そういうと3人はバラバラに別れて、小さな扉を開いて仕事へと出かけてしまった。

私はまた1人ポツンと広い部屋に取り残されて、ただサンサンと振り込んでくる光を眺めていた。

仕事をしなければならない。しかし、まだこの余韻に浸つていて。そんな気分で傍にある椅子に腰をかけた。

窓の外の景色は紺碧の絨毯が幾重にも重なり太陽の光を浴びて乾されている。

その光景があまりにも刺激的で、初めて見るその景色は壮大なような気がした。

ライザにいるころは、ただ魂を狩りに行って、何事もなく仕事を終わらせるためだけに働いた。

それが神への償いなのだと本氣で思っていたから。

「仕事・・・いかなくちゃ。」

けど、それは違う。

そう気づかせてくれたのが、彼女だった。

その時から私の全ては変わり始め、ついにここまで来てしまった。

“ 瑠璃色の風のようこ、貴女が幸せを運びますようこ。 ”

彼女がそういった、あの言葉を。

この場所でもう一度聞くとは思つてなかつた。

“ 瑠璃色の風か。 ”

だから一瞬驚いたの。

貴女が彼の耳元でそう囁いているような気がした。

例えハーレスになつたとしても、私は私。そうでしょ？

だから、私は貴女の言つてくれたように瑠璃色の風になつて、幸せを運ぶ仕事をするから、ね。

それらは私の目の前に舞い降りるように降ってきた。

「な、何これ。」

目の前をヒラヒラと舞うその一枚の白い紙をパツと手で取つて文字に目を通す。

シャナ達が運んできたその紙はどうやら仕事の内容が記されているファイルで、

いつもなら机の端にドサッと積まれているはずの物だつた。

毎日少なくとも50枚を超えるその紙に眼を通して、その人間の命を迎えて行つた。

時間なんか関係ない。その配布された仕事を時間通りに終わらせるまで休みはない。

「え？ たつたこれだけ？」

それなのに、目の前に配られた資料はたつたの一枚。その数に思わず独り言のように呟いた。

その私の声に答える者などなく、それは確かに独り言になつた。たつた一枚。ライザで働いていた時には、それは大変な仕事だからと聞いたのに。

「わつ、この人、もうすぐだ！！」

その資料の中にある「時間」の項目にはもうすぐ時計が示す時が書かれていた。

私達死神がその時間に迎えに行かなければ、魂は地上を彷徨い続け

る事になる。

そう、教わった事がある。

実際にそんな事をしてしまえば、世界の秩序は小さくとも崩れるため、狩り遅れた死神は厳しい処分を下される。

「いってきます。」

誰もいない広い部屋にぺこりと頭を下げて、小さな扉を開いた。ライザやハーレスに与えられる力、それが下界へ通じる全ての扉を開く事と通り抜ける事ができる力。

そして人の命を狩ることができる、それぞれの道具を持つことが許され、人の命を狩れる力。

そうして私達は、仕事をこなしてきた。

人に見られることなく、その寿命の尽きた人々の魂を体という器から切り離し、天へと連れて行く。

（あつた、あそこだ。）

下界に下りるとまず目に映るのは、白い雲。

晴天ならば霧のようない雲が顔にかかる。曇りの日ならば、すこし鬱陶しく感じさせる分厚い雲がお出迎えしてくれて

雨の日は一番嫌いだつた。地上は見え難く、死者を探すのも一苦労な上に、冷たい雨が体を濡らすから。

しかし今日はとても天気がいいのか、霧もとても薄かつた。

それから見えてくるのは、地上にびっしりと生えた家といつ建物。

その中でも一際大きい屋敷のよつな家に、今日死者が眠る。

「あの家だ」

大きな門に細い弦が何本か絡まり、その中のいくつかは枯れている。その門の奥に立つのは、今まで見てきた家の中でもとても古く大きいものだった。

空を飛んでいた体をゆっくりとその家の傍に生えている大きな木に休ませる。

まるで中世のヨーロッパで嫌と言ひほど見てきた家に「ことなく似ている」氣もした。

小さな窓にレンガで築かれた、時代を超えて存在し続ける物だった。

「もうすぐ死ぬのか?」

さわさわと揺れる木に指を絡ませて、まるで誰かが私の頭を撫でてくれたように、木々を優しく撫でた。

こんなふうな気持ちになつたのは初めてだった。

(様子だけ見ておこうかな。)

木は何も答えはしなかつた。

この世に作り出された物には、『存在し続ける物』と『ただそこにあるだけの物』がある。

そしてこの屋敷は今、確かに存在し続けている。

その息はとても小さく弱弱しいが、必死に時の中で生きていた。

古びた壁にそつと手を触れるだけで、その外壁はポロポロと砂や石を落とした。

それから意識を集中させ、壁に溶け込むようにしてなかの通路に足を着いた。

これもまた死神に与えられた力の一つ。

この世界にある物はそれが生きていても、そうでなくとも、自由に行き来できる力。

(案外明るいんだ。)

そこは2階の通路のよつた所で、床は古い木がむき出しこなつている。

外から見ると中は薄暗く、闇を描いていそだつたのに対し、小さな窓からの光は驚異的に屋敷に明るい光を取り入れていた。その通路をしばらく歩いていくと、今日の死者がいる部屋にたどり着いた。

いままでとは違い、今日はたつた1人で終わる仕事なので、時間が余るようだ。

ゆっくりと堪能するよつに辺りを見ながら、茶色い扉に優しく触れた。

スウッと吸い込まれるよつにその部屋に体を通したときだつた。

「・・・誰？」

「ジッと私の靴が床を鳴らす。しかしその音は生きているものには聞こえないはずである。

私は思わずその声に体を止めた。

その声の主に目をやると、黒髪の少女が大きなベッドに横たわっていた。

腰だけ起こして、じつちをジッと見てくる。

しばらくその少女をじつと見つめ返してみると、少女はまた呟いた。

「貴女、誰？」

それは明らかに私に向けられた言葉である事に気づいて私は少女に駆け寄つた。

まだ10にもならない少女であると、あの紙には記されていた。髪は美しい黒で、漆黒さんと同じような匂いがした。

「私の事？」

普通の人にはこの姿も、この声も、私が出す音も何も聞こえない。死者に何を話しかけても、私達の声は届かない。そう教えられてきた。

しかし、私はあまり驚かなかつた。

たつた一人、昔に、たつた一人だけ、私を見つけてくれた人がいる。「そう、貴女。貴女は誰?どうやつてここに入つたの?何しに来たの?」

だから私の中では、この少女だけが私を見る事が出来るわけじゃないと思っていた。

この少女も私の事が見えるのだ。そう思った。しかし、私は驚いていた。私を見れるのは彼女だけだと思っていたから。

昔に、一番最初に私を見つけてくれた彼女だけが私を見られるのだと思っていたのに。

「うーん・・・何て答えようかな。」「じゃあ名前は?」

誰?と聞かれて、『死神です』とはいぐらなんでも答えにいく。それならどう言えばいいのか、と考える私に、彼女は救いの質問をしてきた。

「私の名前は、璃風。」

「り・・ぶ。」

「瑠璃の璃に、風つて書くの。」

につこりと微笑んで見せると、少女がかもし出していた不安のオーラが少しだけ消えたような気がした。

それから彼女は2度ほど瞬きをした後、ゆっくりとその大きな瞳を閉じて言った。

「死神さんにも名前があるのね。」

私達には羽がない。天使や妖精、悪魔にも与えられた羽が、私達にはない。

しかし、人の命を狩る時にだけ、私達の背には大きな翼が現れる。だから天使や妖精や悪魔達は言つ。『死神が羽を広げる時 その魂は眠りにつく』と。

そんな私を見て、少女は『死神さん』と言つた。

それが間違いでなければ、私が死神である事を少女は知つている。

「え・・と。」

「そんなに驚いた? 私が死神を怖がらないから?」

幼い少女は核心をついてくる。

「貴女の名前は琴子ちゃん、だよね?」

話をわざとそらすように聞えるかもしれない私の声に、少女は優しく笑つた。

その笑顔が、窓からの明るい光に照らされて、まるで天使のよう中美しかつた。

「そうよ。」

私は天使に一度だけあつた事がある。

とても美しくて、目を奪われた。ライザのほどんどは天使を憎んでいたが、私は天使が羨ましかつた。

いや、ライザも皆羨ましかつただけなのだと思う。神に愛される彼らが、羨ましくて仕方がなかつた。それと同時に、自分の愚かさを悔やんでいただけなのだ。

「綺麗な子。」

私が思わず呟くと、少女は驚いて、その後またふふっと笑つて見せた。

とても可愛く笑える子だ、と私は思つた。

人間にはたくさん汚れた奴がいる。命を落として当然、地獄に落ちて当然。

もしくは地獄よりもつと酷い・・・死神になつて当然な奴もいる。けど、そんな人間が世の中の9割を、否、9・8割を占めていても、残りの0・2割は彼女のように綺麗なんだ。

「璃風には敵わないわ。」

真っ白な頬が優しく微笑み、その細い腕が私の頬に触れる。そして音歌は、私が出会つた人間の中で最も美しく、そう・・・天使さえも敵わぬほど綺麗だつた。

「死神なんかが、琴子ちゃんに敵うはずがないよ。」

君はとつても美しいんだから。

どうして人間はああも汚れる事ができるのだろうか、そう思わせる奴ばかりなのに。

君は私に思われるんだ。どうしてこんなにも可愛くて綺麗な人間が

命を落として、汚れた人間が生きられるのだろうか。

「ううん。貴女はとっても綺麗だよ？」

汚れたローブを羽織つて、髪の毛もボサボサで、腰には常に魂を狩る道具を携えている。

こんな私を綺麗だといつのなら、この世に生きるどんな汚れた者も綺麗だということになるだろう。

私はそう考えて、細い腕が伸び頬に触れる小さな手に手を添えた。

「ありがとう、琴子ちゃん。」

私がそういうと、彼女は安心したように口を開じた。まだ時間まではじばらくあつた。

今度目覚めるときは、彼女を狩らなければならぬかも知れない。けど、不安はなかつた。

彼女は眠つた後、きっと天使になるんだろうから。

神に愛される、天使に。私達がなりたいと望み続けた者になるんだ。私はなれない。そうなる事が許される生き物じやないから。神は私達にお怒りだつた。ライザやハーレスに就かせられた者は皆、そんな神の愛を求めて仕事をする。

私もそうだつた。

「私ね、死神にあつた事あるけど。璃風ほど綺麗な死神は初めて…だよ？」

睡魔に襲われる寸前で、少女は言った。

死神に会う事が出来るなんて、きっと彼女は特別なのだろう。

私を見る事ができるのも、触れる事ができるのも、きっと彼女が特

別な存在だから。

綺麗な人間にはきっと、私達死神の姿が見えてしまうんだろう。神が唯一私達死神に与えてくれた、神氣という私達を隠す空氣を見透かして。

神に愛される少女はいつだって、美しい光を放つてくれる。その光を感じたとき、ほんの少しだけ神に許されたような気分になるんだ。

音歌がくれた光は、琴子ちゃんよりもずっと眩く目を閉じてしまうほど輝いていた。

どんな人間よりも美しかった。

“もしも名前を付ける事が許される時が来たら、璃風つて付けてくれない？”

私を初めて璃風と呼んだ彼女は、神にも並ぶほど美しい存在である事を私はまだ覚えている。

15という年にして、彼女は眠った。

初めて私に触れた人間。初めて私が触れた人間。初めて私を璃風と呼んだ人間。初めて私に名を付けた人間。

私が今まで見てきた人間で、未だ彼女を超えるほど美しい心を持った人間はいない。

(よく寝てる。)

スヤスヤと眠る少女の頬に手を当てる。少し冷たい、それでも人間の暖かい温度が感じられた。

音歌に出会うまでは、ただ神のために働いてきた。天使を羨み、神に許されるためだけに、神の愛を受けるためだけに。けど、彼女に出会つて全ては変わった。

人間に触れる事も、こんな優しい温度を感じることもなかつた私に  
彼女が教えてくれた。

あの日から私は彼女の約束を果たすために働いた。

その約束はとてもちつぽけなもので、くだらないものだつたけど。  
それでもそれは禁忌だと言わることで、その覚悟を持つて約束を  
した。

神の愛よりも、彼女の言葉が心を占めていた。

だから私は決めた。私は私である死神になろうと。

彼女がそうあつてほしいと望むのなら、私は私という死神になる。  
その魂が精一杯幸せを感じて、眠りにつけるような仕事をする。

“ 瑠璃色の風のよつに、貴女が幸せを運びますよう。 ”

今でもまだ貴女の声が心の中を吹いているの。

一度と忘れる事などない。貴女がくれた、私の存在する意味。

午後2時に差しかかる。

少女の死亡時刻まで残り2時間36分52秒。

「ねえ、璃風。」

「ん？」

目覚めた少女は私を璃風と呼んだ。

寝癖のついた髪の毛を梳かしていたのは、どうやら母親ではなく、この家の家政婦の1人らしい。

この屋敷にいるのは、今は主の娘である琴子ちゃんと、家政婦が6人だという。

その主は長い間海外で仕事をしていて、あまり顔もみないとか。

「お父様に会う事は無理よね？」

そんな子供が、自分は死んでしまうと知つて、父に会いたいと思わないわけがない。

ずっと長い間観察してきたが、人間の感情とはそういうものだ。愛する人に、愛してくれた人に、最後に一度会つておきたい。そう思うものなのだ。

「ごめん。私にできることなんて琴子ちゃんの魂を大事に天に連れて行くことだけなの・・・。」

「そつか。ううん、別にいいの。どうせ死んで会わなくなるんだから、お父様に一言言つておいてやりたかったの。」

少女はわけのわからないことを言つた。

会いたいと言つてみたり、会えなくてもいいといつてみたり。言いたい事があるなら、紙にでも書いておけばいいのに。私はそう思つほかなかつた。

「手紙といつものがあるじやない？」

「つうん。そんな物残しても、あの人はきっと読まないから。」

「そつなんだ。何を言いたかつたの？」

「・・・『アンタの顔を一度と見すすにすむなんて、最高よー』って。

」

大好きだと、そんな言葉は一つも含まれていなかつた。ベッドでそう言つて笑う少女は、少し悲しげで、その言葉を誇らしげに言つた。

けど、私は思つたんだ。彼女の眼は確かに愛する人を思つ田だつたのに、と。

「音歌なら・・・何て言つたかな。」

「ん？」

「・・・私の知つてる子はね、お父さんもお母さんもいなくて、家政婦さんもいないところに一人で住んでたの。もちろん、琴子ちゃんよりも少し大きかつたんだけど。」

目を閉じれば思いだされる。そこにあるもの全てが神に愛されてい るような空間が。

そして、そこに生きていた音歌が。

「その子は眠る前に私に言つたの。“何も怖くない、私は平氣。お父さんとお母さんは待つてくれてるから。”って。

「・・・それ、本当なの？」

「うん。彼女のお父さんとお母さんは、天国つていう場所で待つて

る。彼女はそれを知つてた。「

貴女の目に映つているのは、誰？

「お母さんにも会えるの？」

「うん。」

「会いたい……。ねえ、早く私を連れて行つて……。」

「え……？」

「私を早く殺して……お父様に会わなくよくなつて、お母さんにも会えるんでしょう……？」

なんて悲しい目をしているんだろう。そう思った。

音歌と琴子ちゃんの違いはここなんだろうか。

確かにその目が映すのは愛する人への想いなのに、その想いを否定して、知らないふりして死にたいという。

このまま眠れば彼女はきっと、きっと彼女のお母さんと同じ場所にはいけない。

「彼女は、音歌は眠る時間までずっと、頑張つて生きてた。だから

会えたの。」

「・・・」

「琴子ちゃんは、頑張つて生きて、頑張つて伝えたい」と伝えなくちや。」

「だつて、お父様に会えないんじょ……そんなの……手紙なんか書ききれないよ……！」

ドクンッ”と少女の鼓動が揺れた。

もうすぐ眠る時間が近づいているからだろうか、燃え盛る炎のよつに、消える前に立つた一瞬強い火を灯すよう。

「私が呼ぶ事が無理でも、琴子ちゃんにはできるよ？」

「私に力があれば、彼女は笑顔になれるのだろうか。

「私・・・に？」

「来てつて言えばいいの。言いたい事があるから、戻つてきてつて。

「そんなの・・・お父様は忙しい。」

彼女の眼が映していたのはやつぱり、母親ではなく父親の姿だった。呼び戻したいのは、天国の母ではなく、地上に生きる父なのだ。人間とは不思議なもので、どれほど嫌いだと思っていても、最後に会いたいと思うのはやつぱり愛した人で、愛してくれた人なんだ。

「呼び戻したいのは、お母さんじゃないんだね。」

そう言つて笑うと少女は驚いた顔をして、それまでの悲しげな顔がふわっと優しく微笑んだ。

それからフウとため息をついて、琴子ちゃんは言つた。

「お母様のことが大好きなのに。お父様なんか大嫌いなのに。今はすこくね、お父様に会いたい。」

「そつか。」

真っ白だった。

死神の眼には、死者の色が見えると誰かが言つていた。

それは白ければ白いほど、神に近いとされる。

音歌は純白で、穢れなんて何一つなかった。真っ白。それ以外何も

ない。

そんな音歌の光ほどまではならないが、田の前の少女は白く輝いていた。

私に力があれば、少女は幸せを感じて、天へといけるのだろうか。そう思つた瞬間、閉めきられている窓から小鳥が一羽飛んできた。

「えつーー?」

琴子ちゃんは驚きの声をあげて、私の指に止まる黄色い鳥を見た。私でさえその鳥に驚いていた。手を伸ばすとその指の先にソッと小鳥は足を止める。

黄色くて小さい。どこかで見た事があるその鳥は、まるで風の囁きのよつやな声を放つた。

『ハーレスはライザにはない特別な力が使える。上界での力を、汝はここの中界で使つことが可能なのだ。』

小鳥のその声を聞いて思い出した。

あの日、千華様の部屋へ舞い降りた黄色の小鳥だったのだ。

「私にー?」

『さよう。その力を使うも使わないも汝の自由。ただし。その命の時を止める事はしてはならん。よいか?』

「はい、承知しました。」

風の囁きは指先から飛び立つと、そのまま窓の向こうへと飛んで行ってしまった。

晴れきつた空を飛んでいく黄色い小鳥を見て、少女は言つた。

「もう時間だつて?」

あの声は届かなかつたようで、少し不安げな顔をしている。  
私はその表情とは全く比例せず、嬉しいといつ感情が一気にわきあがつてくる。

「お父さん、私に呼べるかもしれない。」

「え？」

「私には力が仕えるんだつて、今の小鳥が教えてくれた。  
・・・・・貴女を幸せにするためだけに、私はここにいたい。」

“ 璃風を幸せにするためだけに、私はここにいたいの。 ”

昔、音歌が私にそう言つてくれたことがあつた。  
とても優しい声で、鳥のさえずりや風の囁きと一緒に、その声は私に涙を与えた。

わけも分からず零れてくる涙は、何をしても留まることなく落ちていぐ。

あの時の音歌の気持ちが、私にも少し分かつ気がした。

「 世は轟く。我の声よ幾千里もの空を超え、真に愛する者へ  
と届け。 」

手の内で、荒れ狂うほどの風が渦巻いている。しかしその風は優しく吹きながら、声を待つてゐる。

この風がどうか、愛する者へと届きますよう。」

そんな想いが風を大きく強くしてゐるような気がした。声を望む風が出来たとき、少女は呟いた。

「お父様・・・。私、お父様に・・・会いたい。」

『 お父様・・・。私、お父様に・・・会いたい。』

風に響く声はシユウと収まつた。

さあ、走ろうか。愛する人のいる場所まで、何よりも早く、この声を届けようか。

## 「 神風 」

神が届けてくれるよ、きっと。この風に乗せて、貴女が愛する人まで。貴女を愛している人まで。

その風は優しく、強く、大きく、暖かく、人の心に吹き通る風なんだよ。

そう彼女に言つて、ゆっくりと天井を通り越した空へと手をかざす。風は今、空を駆け始めた。

「お父様には・・・眠る前に会いたい。会つて言いたい事があるの。」

「何を言いたいの?」

「・・・『お母様と一緒に待つてるから。大好きなお父様のこと、ずっと見てるよ』って。」

ポタリと、白い布団に涙が零れた。

少女は目の前でそういうながら涙を流している。

その涙は、まるで聖水のように清らかで、透き通つていて、神氣を感じさせる。

私の涙にはないものが、人間からは溢れるほどに零れてくる。

その涙がどんな感情にも当てはまらないほど想いを与えて、私はまるで生きているように鼓動の音を感じる。

綺麗だなんてものじゃないの。触れてしまえば一瞬で、私なんて消えてしまつほど清いもの。

「来る。」

その感情の中を、風が戻ってきた。その風と一緒に戻ってきたのは、たつた一つの大きく重たい足音。

「琴子！……」

「バンッ」

私が通り抜けてきた扉は、大きな音を上げて開かれた。その扉の前に立っていた男は、少女を見て、荒れた息を整わせる事もなく、名を呼んだ。

「お・・と・・さま？」

琴子ちゃんはその男をそう呼んだ。

綺麗な涙はスッと止まり、ただその目に映るのは彼女の愛する人の姿だけ。

「どうして・・・!? どうしてここにいるの?」

「琴子・・・」

「何で?・・・どうして?」

彼女の愛する人の眼に映るのは、彼女だけ。

愛する彼女のために息を荒くしてまで駆けてきた、その男は彼女に近づくと名前だけを呴いてそっと抱きしめた。

ぎゅつ、と大きな腕の中につっぱりとおさまる少女の小さな手が、躊躇いながら、その広い背中に触れ、

弱弱しくその黒い服を精一杯握り締めた。

何の音もないこの部屋で、2人の鼓動が共鳴している。

「琴子・・・ただいま。」

「お帰りなさい、お父様。」

低い声が少女へ優しく声をかける。

少女の高い声が男へと優しく響いている。

それは何てことのない風景なはずなのに、とてもとても幸せな風が流れている。

それ以外、何もなかつた。

言葉はなく、音もない。静かな部屋の中で2人は見つめ合つている。琴子ちゃんはたくさん言いたい事があるのに、何一つ言葉に出来ず。その男は、琴子ちゃんの言葉を聞くために黙り続けてくる。

「貴女にほんの少しの勇気を。」

右手を琴子ちゃんに伸ばして握った手のひらを開くと、ほのかに色づく光が部屋の中を暖かく囲つた。

これが私に出来る唯一の事なのだろう。幸せは直接人が作れるものではなく、気づけばそこに出来上がつているのだと音歌は言つていた。

だから人には幸せを作る力があるけど、それをそのまま使つことはできないのだと。

だから私に出来るのは勇気を「とて、幸せへの後押しをする事だけ。

「お父様の・・バカ。最悪、最低・・・大嫌いっ！…」

少女は怒鳴るようにそう言つた。

人間とは不思議な生き物で、そう思つてもいなことを平然と言つてのけてしまう。

そしてそれが本当かどうかだけを気にしていて、その者が一番伝えたいことなんか目も向けない。

なんておかしな世界だろうと、いつも思つていた。

嘘かどうか何てどうでもこにはずなの」に、それが本当に嘘でも、伝えたいことを分からうとするべきなの」。

「ああ。」

男はただ、泣きじゃくる琴子ちゃんの頭をそつと撫でている。低い声は全てを受け入れるのみに、短く言つた。

「会いたくなかったつ……」のまま、会わないまま天国に・・・、行けたらよかつたの」。

「ああ

この声はその言葉が嘘でも嘘でなくともいいのだと思つてゐる声だつた。

それが何でもよくて、ただまつと奥にある本当の気持ちを知りたいと望んでいる。

いや、違うかな。きっとその全てを知りたいと想つてゐるんだ。私はもうこれ以上何も出来ず、もうすぐそこまで迫つてゐる彼女の終わりの時間を待つてゐた。

「お父様はつ・・・私もお母様も・・・愛しては下さらなかつた・・

つ・

「・・・それは違うよ、琴子。」

どうか幸せだと感じて眠つてほしかつた。

彼女は美しい人間だから、天使になれるだろうと思つんだ。

私には許されない権利が、彼女には『えらべてゐるんだから。

「私は愛していた。母さんも・・・お前のことも。」

「・・え?」

「愛しているだけでは、傍にいられないんだよ。悪かつた。ずっと、そんな気持ちで私と向き合っていたのか。すまない。」

「・どう・・様。」

「ん?」

「・・知つてたわ。・・ちや・・んと、知つてた。お父様が、私達を愛してくれて・・いる事も。

ただ怖くて、お母様の手紙を読まない事も。決して愛していないわけじゃない、そうでしょ? ？」

お母様が死ぬ前に書いた手紙、怖くて開けられない弱虫なだけですよ?」

“そんな物残しても、あの人はきっと読まないから。”

琴子ちゃんがそう言つたのは、母の手紙を、父が読まないからだつたんだ。

そしてそのことがとても不安だつた。

愛する人からの手紙なら読むはずなのに、父は読まなかつたから。それが愛していいからなのか、不安からなのか。琴子ちゃんはそれを知ることが怖かつたんだ。

「読んであげてね。お母様はお父様のこと大好きだつたのよ。」

にっこりと笑う少女の放つ光はそつと優しく、その男を包み込んでいた。

白い羽が生えているかのよう、魅せられた。

「こと・・」

大きなその背中が小さく震えている。

もうすぐ時間だった。少女がこの場所から離れる時間。

この地から、離れる時間。全てにお別れをする時間。

「琴子ちゃん・・・、もうすぐ時間だよ。」

この声に気づいた琴子ちゃんは優しく私に笑いかけると、その小さな手を父の大きな手に乗せて握った。

この世に生を受けた赤子が、大きな大きな愛してくれる者の手をしつかりと握りしめるように。

それから彼女はまた優しく微笑んで言つた。

「お父様、待つてるから。お母様と2人で、待つてる。  
大好きなお父様、眠る時間まで精一杯生きてね。ちゃんと・・ちゃんと見てるから。」

時間だ。

その合図とともに、背中が急に熱くなりその一瞬の痛みを感じながら眼を開いた。

その瞬間にバツと背中で羽が開く音がする。

「お迎えに上がりました。」

黒い羽が背に生える私を、貴女はいつたい何だと思うのかな。  
悪魔？大魔王？墮天使？そんなものならよかつたのにね。  
どうして私は貴女の命を狩りに来た・・・死神なのだろう。

「琴子つ！？」

「おや・・すみ・・・なさい。・・・お父様」

腰にすえたカナリアを取り出してそつと腰に添える。

こんな気持ちになるなんて思わなかつた。

音歌を狩つた時と、とても似ている。苦しいの、すゝく。どうして

私は死神なのだろう。

そんな気持ちが目から何粒かの水滴を落とせらる。息を吹き込むと、風のようく奏でられた音が少女の体の中で光つて、いる宝石のような玉を浮かび上がらせる。体という器から取り出された光は、私の奏でる音の旋律にプチッと糸を切られた。

「綺麗な子。」

初めてあつた時、そう亥いたのがとても昔の事のように感じられる。琴子ちゃんの魂の光は、まるで真珠のように美しく、不思議な気持ちにさせる。

空っぽになつた器に、男はそつとおでこにキスをして、布団をかけた。

それからそつとこつちを見て微笑んだ。

「君がここの子を笑顔してくれたんだね。」

その言葉に驚いて、カナリアを落としそうになつた。

近いうち死ぬ予定もないこの男が、どうして私に微笑む事ができるのか。

いくら綺麗な心を持つていても、私達が見えるのは死ぬ手前の人間だけな筈なのに。

彼はこれからあと30年以上は生き続けることになつていて、微笑んでいる。

「その子を、どうか彼女の元へと運んであげてください。」

その日はまるで天使でも見るようく、優しく向けられている。

背に黒い翼を持つ私を、そんな風に見る人間がいるなんて思わなか

つた。

「はい。」

白い魂が私の周りをゆっくりと回る。

1つの魂でしかないはずなのに、いつもならすぐに連れて行くはずなのに。

涙が止まらないんだ。まるで、音歌を眠らせてしまったときのよう

に・・・。

「ありがとう」

優しく笑う男。その笑顔はまるで琴子ちゃんにそっくりで、綺麗だつた。

死神に微笑むのは、いつだつて綺麗な人間だ。

私は死神なのに、涙を流して悲しんでいる。

音歌なら、それは普通だと言つてくれるのだろうか。でも、君と出

会つてからおかしなことばっかりだ。

泣いた事なんてなかつたのに、君を狩つた時、涙が出た。地上で力を使つたのだつて、はじめてだ。

生きた人間に微笑まれたのだつて。

この暖かくて柔らかくて心地いい感情を、君なら何て呼んだのかな?  
ねえもしかして、これが幸せといつものなの?

どれほど追い求めて手に入る事のなかつた、神に愛された証拠なの?

幸せは直接人が作れるものではなく、気づけばそこに出来上がつて  
いるつていうのは本当なんだね。

私は神に愛された死神。

神の愛を求める続ける私のような死神を、神は決して愛してなどくれないと思っていたのに。

今はそう、思い込みでもいいの。

この感情は幸せと呼ばれる、神に愛された者のみが与えられる物だと思つてもいいですか。

「暇だなあ・・・」

アーチ型の大きな窓の外から振り込む光を浴びながら、呟いた。  
戻ってきても誰もいないこの部屋は、私を寂しく受け入れてくれた。  
たった1件の仕事を、ライザにいるころよりずっとずつと時間をかけて終わらせた気がする。

いや、気のせいではなくそうなのだ。

彼女に出会ってから、私はライザの中でも変だと言われた。  
それまでは優等生だといわれ続けてきた私は、たった一つの人間の魂によつて、全てを変えられた。

けど、私は何も後悔はしていない。そう、それは不思議なほど。

こうなつてよかつたと思っている。

変だと言われ、優等生から不良へと名を変えて、最後には禁忌を犯した者とまでになったのに。

それでも、こうなれてよかつたと思っている。

「音歌の唄が聞きたいな・・・」

そうさせたのは、たつた一つの人間の魂。

その器である体の汚れさえ、感じさせないほど美しい魂はとてもとても唄が上手で、死神である私でさえ聞き入つてしまつた。

「・・・なんだ、いたのか。」

キイと小さく音を立てて開いた扉から、声がして急いでその方向へ顔を向ける。

そこに立つていたのは、黒いマントを羽織つた漆黒さん。

「お帰りなさい。」

「ああ。」

短い返事からは、何故だろうか少しの悲しみを感じてしまつ。彼はそれだけ言ひと、バサツと黒い翼を広げて羽をむしった。その様子を見て、私は思わず小さく声を上げてしまつ。

「えつ」

「・・・何だ?」

それから彼は私にそう声をかけて、すぐ傍のソファーに腰を下ろすと、ごろんと横になつた。

そしてむしitた黒い羽をパツと上に投げると、フウと息を吹いた。その瞬間、黒い羽はその周りに黒い神氣をまとい、丸い球の中に姿をくらませる。

「え・・・と、どうして、羽・・・?」

「お前、知らないのか。」

「え?」

漆黒さんがそう言ひと、黒の神氣がパアと空氣に溶けながら消えて、その中から小さな黒鳥が現れた。

その黒い小鳥はパタパタと漆黒さんの周りを回ると、漆黒さんの伸びした人差し指に止まり、ピチチと可愛く鳴いた。

漆黒さんはその鳥にそつと微笑むと、小鳥の小さな頭を撫でながら呪文のような言葉を囁いた。

「いいか?さつきの魂がどこへ行つたか探して来るんだ。分かつたな?」

漆黒さんのその声に小鳥は頷くわけでもなく、羽を2度揺らして指を離れた。

しばらく部屋の天井部分を舞っていたその黒鳥は、急に姿を消してしまった。

「あれは分身。 そうか、お前はまだライザから」うちに来たばかりだから知らないのか。」

「はい。」

「ならしい本がたくさん置いてある、書蔵庫へでも行つて見ひ。」

「書蔵庫ですか？」

「ああ。 フレリーが管理する、ライザとハーレスに関する書物置き場だ。」

フレリーの名前は聞いた事があるが、実際に見た事はない。主に図書関係の仕事についているというが、私は本と書の物があり好きではなく、全く関わりがないのだ。

「はあ・・。ありがとうございます。」

本、と聞くとあまり行く気にはなれないが、漆黒さんがしたような術が使えるようになるなら、

少しは我慢のしがいもあるかもしだれない。

お礼を言つと漆黒さんはそのまま目を閉じて、ソファーの上で眠つてしまつた。

また静かな部屋に戻つたこの部屋にいるよつは、その書蔵庫へ行って本でも読んだほうが、

時間つぶしにはなるよつな気がして、眠つた漆黒さんに布団をかけて、私はその部屋を後についた。

長い長い廊下を歩いていくと、確かメインホールがあるのを思い出

二二九  
ハジメテコトヘリサヘ

赤い紺毯は、所々にわけのわからぬシミがついている。

璃風、と名前を呼ばれて、絨毯に向けていた目をパッと前に戻すと、少し離れた場所に良く知る顔がにつこりと笑っていた。

「梓衣！」

千華様に昇格を言い渡されたあと、梓衣とは一度も会っていないことを思い出すと、久しぶりに見たその顔も、聞いた声もとても懐かしく感じた。

「お前！处分言い渡されたんじゃ……！？」

私 ハリレスに昇格したんだ

「 そうか・・・なら、どうして連絡の1つもしねーんだよーめりやくぢや心配したんだからなーー！」

梓衣はいつだつてそう私を見守つていくれた。

「ごめん。ありがとうございます、心配してくれて。」

よかつたよ、本当。死神が消滅の門をくぐる事は多いから……。

「梓衣、大好き。」

変だといわれた私に、唯一笑いかけていてくれたライザ。

私が困っていると助けてくれて、自分の立場を気にせず私を守つてくれた。

「はいはい、呑氣なやつだ。」

「でも、そつか。もう一度と会えなくなると思つてたのに、色々あつたから忘れちゃつてた。」

「忘れるな。つか、お前何したんだ。」

梓衣が上から見下ろしていくるこの景色も、もつ見られないのだと心中では諦めていたのに。

そう考えると、どうして私はハーレスに昇格という処分を受けたのか、それはまるで奇跡とでも言つかのよつた気分だ。しかし死神は奇跡などを信じるのではない。偶然、奇跡、そんなものを感じる事はない。

全ては必然、この世界は関わりあつて存在しているのだから。

「何つて・・・まあ、ね。音歌との約束を守つただけ。」

「音歌つて人間か?」

「そう。とつても、とつても綺麗な声で歌う綺麗な魂を持つた人間。」

「

漆黒さんが私に書蔵庫を勧めてくれたのも、そのおかげでこうして梓衣に会えた事も、全て必然。

どんな小さなことにも、その意味は確かに存在する。

私達はそんな世界に存在し続ける、意味あるものだと思つんだ。

そう、私が彼女と会つたのも必然。全てに意味があつた。

彼女と出会い、私は変わり、彼女との約束を守り、ハーレスへと昇格した。

彼女との出会いはもしかすると、ここへ来るための出会いだったのかも知れない。

だけど、私はそれ以上にきっと何かもつと大きな意味を持っている

と思つんだ。

「本当に、変わつたな。」

「私もそう思う。」

人間なんか、唯の魂でしかなかつた。私が狩るべき物でしかなかつた。

そう思い続け仕事をしていた私は、音歌という人間に出会つて、神が人を愛する意味を知つたんだ。

一番最初に知つたのは、それだつた。

神が人を愛する理由。人が神に愛される理由。

きつと彼女に出会つまでは、知ることのなかつた事だ。

「俺も変われるだろ？」

全ては必然に、動き続けているの。

「うん、きつと。」

私が彼女に出会えたよ！」。

「私ね、音歌に出会つて思つたんだ。神様に愛されることだけを望んで狩り続けてたけど、もしかしたら本当は神様はとっくに私を、うん、皆を愛して下さつていてるんじゃないかなって。」

音歌に出会い、たくさんの人間を見て、琴子ちゃんと出会い私は思つたの。

全てに意味があるのなら、私が死神である理由も確かにあるんじやないか、と。

そしてそれは神が与えてくれた愛を知つて、その愛を配る事じやないのだろうかと。

「まさか・・・。神が愛するのは生きる人間と、天使だけだ。俺達が愛されてるはずがないだろ！？神は俺達にお怒りだ。だから、その許しを得たくて俺達は・・・」

梓衣の顔が切なげに歪んだ。まるで音歌に出会う前の私のように、神に許されるためだけに働いているんだ。

きつと、違うの。俺達が魂を狩る死神であるのは、神に許されるためじやない。神に愛されるためじやない。

今はまだ、『神は絶対に俺達を愛している』とは言い切れない。だけど、哀しいじやない。ただ神に愛されるために仕事をして、それが存在する意味だなんて。

「俺達が存在する意味は、たくさんあるんだよ。

神はきつと俺達をもうすでに許してくださつてると思つ。もしかしたらそうじやないかもしれない。だけどね。だけど、そうじやなくても。

私が梓衣を大好きなように、愛してくれる人はいるんだよ。」

俺達は愚かな人間だつた。そんな愚かな人間は、神は罰を『えられた。

それが死神と言う人間の魂を狩る者。

だから死神は皆、神様の許しを得たくて、神様の愛を得たくて、唯仕事をこなす。

それが償いだと思い続けて。

いつか誰かが気づくのを、神は待ち続けているに違いない。

愚かな人間だつた者へ罰を『えたのではなく、

幸せを知らずに天へ昇った人間に、ただ幸せの意味を知るチャンスを与えたのだと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4896d/>

---

- Death blooms -

2010年10月12日06時53分発行